

目次

卷頭言.....一

院政・鎌倉時代の副詞語彙.....佐々木 峻.....五

漢籍訓点資料における文末表現について.....松本 光隆.....六

龍門文庫蔵『浄土三部經』について.....佐々木 勇.....五〇

——『阿弥陀經』『觀無量壽經』の字音注を中心に——

平安時代の「解文」における文章構成の類型的性格について.....西村 浩子.....七

読経口伝明鏡集(故山田孝雄博士蔵文安本 川瀬一馬博士旧蔵文龜本) 解説並びに影印.....沼本 克明.....六四

随心院蔵仮名書き往生講式解説並びに影印・翻刻.....花野 憲道.....九

随心院蔵袖中抄卷第一断簡解説並びに影印・解説.....山本 真吾.....二八〇

随心院蔵の平家物語断簡について.....小林 芳規.....三〇九

『鎌倉時代語研究』(第一輯〜第十輯)索引(三)——語彙索引——.....金子 彰.....三三三

漢籍訓点資料に於ける文末表現について

— 醍醐寺本遊仙窟を中心に —

松 本 光 隆

目 次

はじめに

- 一、漢籍訓点資料に於ける和文語の出現
- 二、醍醐寺本遊仙窟に於ける文末表現
- 三、漢籍訓点資料に於ける文末表現
おわりに

はじめに

平安・鎌倉時代の訓点資料に於ける訓読法の異同は、先学の御研究によりかなりの部分が明らかにされている⁽¹⁾。宗派間の訓読法の特徴的異同や、博士家間の異同等が解明され、特に、漢籍の訓読に於ける訓読法の異同は、かなり詳細な部分まで解明されている。漢字音の面からは、漢籍の資料の中に、紀伝道関係の資料と明経道関係の資料との間で質的な異同のあることが論じられている⁽²⁾。

本稿は、こうした先学の御高論に導かれて、醍醐寺本遊仙窟を中心に、漢籍訓点資料に於ける文末表現を取り上げて、紀伝道関係資料と明経道関係資料との間に、訓読語の上に差違があつたものであることを述べようとするものである。

一、漢籍訓点資料に於ける和文語の出現

遊仙窟は、唐代の小説で、本文は四六文を用い、韻散文を交えて、唐代の俗語も多いといわれるものである。本邦への伝来は、奈良時代であると言われ、万葉集等への影響が指摘され、以来、日本文学への影響、少なからざるものがあると言われる。

鎌倉時代の訓点資料としては、近年、山崎誠氏により、鎌倉時代語研究第八輯に紹介された零巻が古く、南北朝時代の真福寺蔵本、醍醐寺蔵本が知られている。院政期以前の資料は加點本、無點本を問わず知られてはいないようである。本稿に取り上げる醍醐寺本遊仙窟には、次の如き奥書が存する。

右此書者江中納言維時卿康和 聖主爲／學士之際再三蒙 宣旨之處未聞今見之／剩仰天之境節惑仁云木古嶋神主所傳也／仍維時卿乘毛車罷之處彼神主着布衣目／文車虫澆書取出之云 君者文王之太祖／我朝之文士也然而所存如此仍被受早其後／所召御侍讀也

本云正安二年二月十一日書寫之早

同廿八日交点了

(以上本奥書)

康永三年十月十六日模之訖／

法印權大僧都宗算(花押)

醍醐寺本遊仙窟は、南北朝時代康永三年の書寫であるが、その親本は、正安二年に書寫・加點されたものであることが知られる訓点資料である。本奥書には、大江維時の名が見えるものであるが、大江家の訓説を伝えたものであるとするには、否定的な研究も存する⁽³⁾。

醍醐寺本遊仙窟の訓読は、日本書紀の訓読や石山寺蔵大唐西域記長寛点の訓読とともに、一般の訓点資料とは異なる特殊な訓読をされたものとして位置付けられているものであるが、その特殊性の一として、和文的訓読語が指摘されて